

# 家庭教育通信

第6号 平成21年2月11日発行

## <テーマ> こどもどうしの衝突は大切な学びの場

### 親子関係から友達関係へ

こどもは1歳半～3歳ごろに、親との濃密なやり取りの中で「自分らしさ」を確立し(=イヤイヤ期)、3歳ごろになると、友達関係へと人間関係の幅を広げていきます。

つまり2歳～3歳以降は親子関係から友達関係へと関係性の幅が広がる時期にあたります。このころになると、こどもは、大人との関係だけではなく、同じ年代のこどもとの体験を通して社会性を学んでいきます。

### こどものトラブルには

こどもどうしの体験により社会性を身につけることは、こどもにとって重要です。幼稚園や保育園の入園前にこどもをお友達と遊ばせることで、こどもどうしがふれあう機会を意識的に作っていきましょう。

その際、親にとって気が重いのは、こどもどうしのトラブルでしょう。互いの主張がぶつかりあい、物を取り合ったり相手のお子さんを叩いてしまったりする場面にどう対処したらいいのか、また、そのことが親どうしの関係に悪影響を及ぼすのではないかと、心配される方もいらっしゃるでしょう。

そのような時は、親がすぐに間に入って干渉するのではなく、危険な場合以外は一呼吸おいて少しだけこどもどうしでどう対処するのかを見守る余裕を持つことが必要です。

### 見守る・つなぐ

実は、こどもどうしが衝突した時こそ、こどもが社会性を学ぶ貴重な機会なのです。

少し待ってあげることで、こどもは、どのように対処するのかを自ら考え、工夫しようとしています。経験を重ねれば、お友達のおもちゃで遊びたい時に自分のおもちゃを差し出して、これを貸すからそっちを貸して、という交渉ができるようになることもあります。

とはいっても、こどもはまだ社会性の初心者ですから、関係調整が困難な場合は、親が支援します。「叩くと　ちゃん痛いから、やめようね」「おもちゃを使いたいときは貸してってお願いしようね」「　くんのおもちゃを借りる代わりに自分のおもちゃを貸してあげようね」など、こどもとこどもの間をつなぐ声かけをしてあげましょう。

(臨床心理士 平山敦子)